

創価大学英文学会

# 英語英文学研究

第80号 (第41卷 第2号)

2017年3月



**STUDIES IN THE ENGLISH  
LANGUAGE & LITERATURE**

No. 80 (Vol. 41, No. 2)

*March 2017*

SOKA UNIVERSITY



## 目 次

each other と one another の語法 (9)	
— Lorien 5, 6, 7 の場合 — .....	松島 龍太郎 1
 <i>Longman Dictionary of Contemporary English</i> 第6版の	
‘functional language’ の分析	
— モダリティ表現について — .....	藤本 和子 21



## each other と one another の語法 (9)

### — Lorien 5, 6, 7 の場合 —

松島 龍太郎

#### 0. Introduction

これまで松島 (2013a) から始めた2つの相互代名詞の each other と one another について、構成員 (referent) の数が2であるのかそれよりも多いのかによる使い分けは見当たらず、今まで扱った作品群ではそれ以外にさまざまな使い方があることを見て来た。本稿は、*I Am Number Four* シリーズが完結したため、松島 (2015a) では扱えなかった第5, 6, 7巻を扱う。第4巻までと同じく、無題の prologue を除き数名の語り手が1人称で入れ替わりながら物語る動詞は基本的に現在時制を用いている。

構成員の数については、2者および3者以上の many で分類する。所有格は別に扱う。「連続」「グループ」「代表」「近隣グループ」「それぞれ」についても確認する。

例文については、each other と one another およびその所有格には下線を引き、その referent および員数は太字とし、その他の関連した部分には波下線を引く。

引用の例文は、構成員ができるだけ分かるように、関係した文の前後からも示すことがある。例文の後の [brackets] に構成員 (referent) を入れる。末尾の(丸カッコ)の数字は掲載ページである。また、“S.” は出現場所が Speech 部分であることを示す。

#### 1. Lorien 05: *The Revenge of Seven*

この第5巻では、each other が16例、one another が1例見つかった。所有格はどちらもなかった。以下、構成員2の each other、構成員 many の each other、one

another の順に見ていこう.

なお, narration は章単位で John (Number Four), Number Six, Ella が担当している.

### 1.1 Each other: 構成員 2

構成員が2のものは全16例中ちょうど半数の8例である. Narrator が John のものが5例, Six が2例, Ella が1例である. まず, 語り手 John の5例から抜おう. 語り手自らを構成員に含むものは5例中2例で, 両方とも相手は girlfriend の Sarah である. 例文 (1) は John と Sarah が別行動をとることになり Baltimore のパスターミナルで別れを惜しむ場面である:

- (1) We fall silent, holding tight to each other, watching the minutes on the dashboard clock slowly blink away. [Sarah & John] (38)

次の (2) では, Sarah と John は依然として別行動をしており, 二人は8時間ごとに電話で連絡を取り合っている:

- (2) “Sarah, I’ve gotta go,” I say, feeling reluctant to hang up the phone. **We’ve** been checking in with each other every eight hours like we planned, and I feel a sense of relief every time I hear her voice. [Sarah & John] (147)

語り手 John の残りの3例はいずれも Nine と Five の二人の闘いである. Mogadorian の Setrákus Ra は地球征服をもくろみ New York に降り立つが, Ella と Five の行動のために失敗する. John は Ra を倒そうとするが, Ra を攻撃すると Ella にそのダメージが転化されると Five から知らされる. John は Nine にそれを伝えようとするが, Eight を倒した Five を許すことのできない Nine は Five を見るや倒そうとする. John は Garde 同士で争うよりも Ra を打ち倒すことを優先したいのだが, Nine にはそれがなかなか通じない:

- (3) Nine glances in my direction, and that’s when Five uppercuts him. With a roar, Nine dives back at him, and they slam together. **They** hurl punches at each other, a tangled mess of limbs that I lose sight of when they go crashing through the front window of the United Nations building. [Nine & Five] (351)
- (4) “I lost him in the chaos,” Sam replies, his voice breaking. “**He and Five** were



killing each other.” S. [Nine & Five] (356)

- (5) I don't know where Nine and Five are. There aren't any new scars burning their way across my ankle, so **they** haven't killed each other yet. [Nine & Five] (368)

語り手 Six の 2 例は両方の構成員に Marina (Number Seven) がいて、うち 1 例は語り手 Six を含む。Six たちは Florida の沼地で Mogadorian の基地を目指している。例文 (6) は、生存している Garde が全員めぐりあえ、Five の裏切りを知らない時の思い出である。「連続」である：

- (6) It was only a few days ago that Five led us through waters similar to these. We'd been happier then—I remember **Marina and Eight** clinging to each other, something sparking there, and Nine whooping and acting stupid every time he spotted an alligator. [Marina & Eight] (76)

例文 (7) は敵基地に潜入している。構成員に Six が含まれる。隣同士の「連続」である：

- (7) **Marina and I** crouch next to each other, both of us huddled behind the flipped-over metal table. [Marina and Six] (161)

語り手 Ella からの (8) は、Ra の旗艦 the *Anubis* に捕らえられている Ella を Five が救出しようとしている場面で、Five はこのとき始めて知るのであるが、二人は Ra によって婚約者同士となっている。何気ない振りをしていれば脱出口まで行けるだろう。仲良く見せるのはそのための偽装工作である：

- (8) “**We**’re just a newly betrothed couple, getting to know each other,” I say. S. [Five & Ella] (272)

## 1.2 Each other: 構成員 many

構成員 many の each other は 8 例である。語り手 Six に 4 例、John に 4 例である。Six の 4 例はすべて構成員に自らを含んでいる。

Six は Legacy で体を透明にでき、他の 2 名は Six に触れていることで透明になれる。沼地の敵基地に侵入し、発見されないように 3 人は透明になっている。Six を真ん中にして直接手を握り合っているのも、Six と Marina、Six と Nine という

組み合わせで、Marina, Six, Nine の 3 人 1 列の「連続」となっている：

- (1) We approach slowly, grasping on to each other, keeping as quiet as possible. [Nine, Marina, Six] (127)

例文 (2) は (1) に続くシーンで、透明のままであるがどうやら Five に存在を悟られたようである。ここは慎重に動かざるを得ない。やはり Six を中心にして直接手を握り合っている 3 人の 1 列の「連続」である：

- (2) We move just inches at a time, careful of each other, not making any noise. [Nine, Marina, Six] (134)

例文 (3) の us の構成員は Nine, Eight, Marina, Six, Five の 5 名であるが、Five が裏切ったため、4 名の Garde 対 Five の 2 グループである。Five は Garde の個々と対立するわけであるので、Garde グループは 4 名のおのおのが Five に対する「代表」となる：

- (3) “Do you think Eight would want that?” I ask, honestly wondering. “He died trying to keep **us** from killing each other.” S. [The four Garde (Nine, Eight, Marina, Six) & Five] (141)

例文 (4) は、Adam, Marina, Six の 3 名が、Eight の遺体を伴って、Lorien たちにとって Sanctuary とされるピラミッドに登る場面である。実は Ra もここを目指している：

- (4) We don't talk much, except to tell each other when a particularly tricky section of steps is coming. [Adam, Marina, Six] (308)

語り手 John の 4 例にはすべて John 自身は含まれない。例文 (5) では、John たちは Adam の旧家 (Mogadorian の基地であった) において、Garde 探知機を使って Florida にいる Six 達の動向を案じている。探知された Garde は 4 名で、John は Nine, Marina, Six, Eight だと思うが、実際は、Eight は遺体となっており Five が反応している<sup>1</sup>。John はモニター上の信号を見ているが、それが示す Garde たちの重なり合いの「連続」である：

- (5) “They're almost on top of each other,” I say. “All four of them.” S. [Nine,

---

1 例文 1.2 (1), (2), (3) を参照。

Marina, Six, Eight (but really Five)] (153)

例文(6)は、Mogadorianの怪獣Pikenたちに闘いを強いたことをAdamの父親が述懐している。「それぞれ」である：

- (6) “We used to fight **Piken** against each other in this place,” the General muses, waving his hand at the enclosed space. S. [Piken]<sup>2</sup> (108)

次の2例は構成員が無生物である。例文(7)は、Mogadorianの基地センターであったAdamの旧家の地下の様子で、無生物の「連続」である：

- (7) We pass other cracks as we navigate the twisting hallways, places where the foundation shifted, **broken sections of concrete** grinding against each other. [Broken sections of concrete] (149)

例文(8)は、そのAdamの旧家に到着したSUVの一隊である。FBIのAgent Walkerが率いていて、これからはJohnたちの手伝いをしたいと申し出る。無生物で横並びの「連続」である：

- (8) Meanwhile, undeterred by the lightning strike, a parade of black SUVs files up the access road, blue lights flashing beneath their windshields. **They** skid to a stop next to each other in a tight formation, eventually creating a blockade of bulletproof glass and shiny, dent-resistant paneling. [Black SUVs] (179)

### 1.3 One another

相互代名詞 one another は1例だけで構成員は many で、語り手 Ella のところであり、「近隣グループ」である：

- (1) **Dozens of Mogadorians** have gathered to watch Earth approach, an excited energy in the air as they whisper to one another, probably talking about which swath of land they'll pillage first. [Dozens of Mogadorians] (273)

### 1.4 まとめ

この巻では、相互代名詞は両方現れるが<sup>2</sup>、each other が<sup>2</sup>16例、one another が<sup>1</sup>1例と、

---

2 Piken は単複同形である。

第4巻同様出現数は少なくなっている。所有格は出現しない。

構成員2の each other と many の each other は8例ずつ、ちょうど半々であり、数による使い分けは見られない。1例だけの one another は many である。

語り手の John, Six, Ella を含むものは each other の構成員2で4例、many で4例、計8例、つまり半数である。Speech で発話者を含むものが1例ある。

Speech 中に現れるものは、構成員2で2例、many で3例、計5例で約1/3である。「連続」は構成員2で2例、many で5例あり、many のうち2例は構成員が無生物である。「代表」が1例あり、one another の1例は「近隣グループ」である。

出現率（例の現れるページの割合で、数字が小さいほど頻度が増す）は、本文371ページで、each other が23.19 (371/16)、one another が371 (371/1) で、両方合わせると21.82 (371/17) である。

## 2. Lorien 06: *The Fate of Ten*

この第6巻では、each other が15例、each other's が1例、one another が1例見つかった。所有格 one another's はなかった。以下、構成員2の each other、構成員 many の each other、所有格の each other、one another の順に見ていこう。なお、無題の prologue は三人称で語られるが、Chapter One からの narration は John (Number Four), Number Six, Ella の3名が担当している。

### 2.1 Each other: 構成員2

構成員が確実に2のものは7例である。もう1例は2か3かで曖昧であるが、2で扱うことにし、計8例とする。語り手 John のところで6例あり、うち4例では構成員が Five と Nine である。この2名の闘いは第5巻から続いていて、John のいる New York で行なわれている：

(1) “**They**’re killing each other,” I say. S. [Nine & Five] (24)

例文 (2) では、Five は Eight を倒した憎き奴ではあるが、John としては Five を救いたいと思っている：

(2) Hopefully, **Nine and Five** don’t kill each other before we get there. [Nine & Five]

(40)

例文(3)は、念動telekinesisを使う者が銀行の中に隠れている。誰だか分からないが、JohnはNineかFiveのどちらかだと思う：

- (3) No one comes out. Maybe whichever Garde is inside is injured. After a long day of fighting each other and the Mogs, **they**'re probably more worn out than me. [Nine & Five] (46)

構成員がNineとFiveの4例目を抜く前に、時間順に例文を見ていこう。Ellaは、Sanctuaryで新しい「能力」を発揮して、Gardeたちを彼女が創った「意識世界」へと誘う。このときJohn, Sam, Nine, Five, Daniela<sup>3</sup>はRaの生み出した大怪獣Mogasaur<sup>4</sup>と対峙している。例文(4)はその「意識世界」に引き込まれ現実世界では意識を失うところである。ただし、現実世界ではほんの一瞬の出来事で、この闘いには影響しない。二名の「重なり合い」の「連続」である：

- (4) I'm cut off as both Daniela and Nine go all herky-jerky, their eyes filling with the same blue light. **They** slump to the ground at the same time, collapsing on top of each other. [Daniela & Nine]<sup>5</sup> (272)

例文(5)では、JohnとSamがEllaの意識世界から現実に復帰し、Raの生み出した大怪獣のthe Hunterと再び対峙して、とにかく態勢を整えようとするが、二名の「重なり合い」の「連続」であり、これのみ語り手Johnを含んでいる：

- (5) I've still got an arm around Sam from when I grabbed him before we all briefly fainted. He's got his wits back too, so **we** stumble against each other but manage to get it together and run. [Sam & John] (380)

例文(6)で、このthe thingは、Raの生み出した大怪獣であるが、石化光線能力を身に付けたDanielaとJohnの放った石化光線によりほんの数秒で大きな石像と化してしまったものである。NineとFiveの第4例で、二人はずいぶんと手こずっ

---

3 DanielaはSanctuaryの働きでGardeの「能力」が使えるようになった地球人の若者である。Samも第5巻の最後でこの「能力」を発揮する。彼らはhuman Gardeと呼ばれる。

4 名前をthe Hunterという。

5 Nineは6例中5例の構成員として現れる。

ていたため、拍子抜けしている：

- (6) **Nine and Five** stare up at the thing, too confused to even fight each other. [Nine & Five] (391)

語り手 Six には2例ある。例文 (7) では、Marina と Six は Sanctuary のピラミッドにいるが、Ella からテレパシーで逃げろと言われて戸惑っている。Ella からのテレパシーは二人にとって初めての経験である：

- (7) **Marina and I** stare at each other, both of us frozen. [Marina & Six] (223)

Garde たちが地球にやってきた宇宙船以外にもう一隻非公式の宇宙船が地球に来ていて、その船のパイロットが (8) の Lexa である。この艦には Ella と Ella の Cêpan の Crayton と Lexa の友人の Zophie の計4名が乗船していた。いわゆる「おとな」が3名いたので構成員は3も考えられる。しかし、例文の *he*, *his* は Crayton であり、その流れで行けばこの *we* は Crayton と Lexa の2名である<sup>6</sup>：

- (8) “I guess he wouldn’t have,” Lexa replies, frowning slightly. “His only concern was keeping Ella alive. **We** agreed not to have contact with each other. It was safer for everyone if we kept our distance. You know how the Mogs are. They can’t torture any information out of you if you don’t actually know anything.” S. [Crayton & Lexa] (208)

## 2.2 Each other: 構成員 many

構成員 many の *each other* は7例である。語り手 John に4例、Six に3例である。自分を構成員に含むものは John に2例、Six に1例ある。

例文 (1) の Daniela は「能力」が使えるようになった地球人 (human Garde) で、銀行に隠れていた娘である<sup>7</sup>。John は彼女を仲間に入れようと説得するが、Daniela はなかなか色よい返事をしない。「それぞれ」である：

---

6 連絡を取り合わないというのは、最初はおとなたち3名の取り決めであろうが、この艦の乗員名が分かってから Zophie には言及されず、もっぱら Crayton と Ella について語られる。そして、この例文の後で Zophie が Mogadorian に倒されていたことが分かる。

7 2.1 (3) を参照。

- (1) “**We** can help each other. We have to, or we won’t survive,” I say, thinking not just of the three of us, but of humans and Loric. S. [Daniela, Sam, John, humans, and Loric] (53)

WalkerはFBI agentで、最初はJohnたちを捕らえようとしていたが、実情を知り、Garde側に付く。例文(2)の構成員はアメリカ連邦政府の関係者で「それぞれ」である：

- (2) “**Most of them** don’t even trust each other anymore. And anyway, *you* shouldn’t trust them,” Walker replies emphatically. S. [People in Washington] (130)

例文(3)は、Raの旗艦 the *Anubis* がNew YorkからSanctuaryに向けて飛び去るシーンである。「それぞれ」である：

- (3) The camerawork is jittery and the audio is convoluted with screams and **soldiers** shouting orders to each other. [Soldiers] (172)

例文(4)は、裏切り者のFiveが瀕死の状態で、Johnは彼を助けるべきだと友人のSamを説得している。JohnたちGardeのグループ対Fiveという2つの「グループ」であるが、1対1で闘う場合、Gardeたちは「代表」となる：

- (4) “This has gone too far,” I say. “**We’re** not killing each other, not anymore. Help me save him, Sam.” [The Garde & Five] (259)

語り手Sixの3例であるが、まず、(5)はLexaがSixに言う言葉で、Number OneからNumber NineまでのCêpanのことで9名である。「それぞれ」である：

- (5) “You know why, Six. For the same reasons that **your Cêpan** didn’t try to find each other.” S. [Your Cêpan] (208)

例文(6)は、Mogadorianたちの「それぞれ」である：

- (6) When the ground quakes it makes it nearly impossible for the Mogs to properly aim. **Some of them** go toppling into each other, blaster fire zigzagging in every direction but straight. [Some of the Mogs] (285)

Gardeとhuman GardeはEllaの能力で意識を失った後、Ellaの導きで「意識世界」の中で一堂に会することになる。例文(7)では、数名のGardeにつき1名の「人物」が現れるが、Gardeは自分のCêpanと会っていて、他のGardeのCêpanは見るこ

ができない。この場面では、SixはKatarinaと会い、MarinaはAdelinaと話をしている。MogadorianのAdamはCêpanがいらないが自分に能力を与えてくれたNumber Oneを見ていると思われる：

- (7) I'm in a bit of a daze, mostly because I'm being led down a long hallway by Katarina, my dead Cêpan. Marina and Adam lag a few steps behind me. **We** didn't have much to say to each other when we "woke up" in some lavish private library.  
[Adam, Marina, Six] (344)

### 2.3 *Each other's*

所有格の*each other's*の構成員は3名でmanyである。Ellaにより意識世界へと引き込まれたFive, Nine, Johnの3名である。おのおのが自分のCêpanに会っていて他の2名のCêpanは見ることができない<sup>8</sup>。Johnは語り手であるためHenriということがすぐに分かる。NineはSendorと自分のCêpanに呼びかける。Fiveは黙っているためはっきりしないが、やはり自分のCêpanであろうと推測できる。ここにいる3名がおのおのの訪問者に会っていることから「代表」ということができる：

- (1) I glance first at Nine and then to Five, who still hasn't said anything but appears to be listening intently, and finally back to Henri. **We** can't see or hear each other's visitors, only our own. [Five, Nine, John] (341)

### 2.4 *One another*

相互代名詞*one another*の構成員はmanyの3で、これのみ無生物である。語り手はJohnで、3枚の透明の写真の重なり合いの「連続」であり、EllaがテレパシーでJohnに危険を知らそうとしている。Sanctuaryのあるジャングル、敵の旗艦Anubisの操縦室、地下鉄の内部の3つの像が同時にJohnには見えるが、その意味はうまく伝わらない：

- (1) Before Ella can answer, her form contorts, again turning pale and black-veined.  
The scenery flashes, the jungle suddenly overlapping with the *Anubis* operating

---

8 2.2 (7) 参照。



room and also with what looks to be the inside of a subway car—all three places existing simultaneously, like **three transparent pictures** laid on top of one another. [Three transparent pictures] (104)

## 2.5 まとめ

所有格1例を含めたeach otherは16例，one anotherは1例である．第5巻と同じく第1-4巻よりも少ない．

構成員2のものは8例，manyは所有格を含めて8例であり，構成員数による使い分けは見られない．「重なり合い」の「連続」が3例，「代表」が2例である．構成員manyでは「それぞれ」が5例と割合が高くなっている．

語り手を含むものはJohnとSixで3例ずつと少ない．Speechで発話者を含むものが1例ある．Speechは構成員2で2例，manyで3例と少ない．

1例だけのone anotherはmanyであり，構成員が無生物の唯一の例であり「重なり合い」の「連続」である．

## 3. Lorien 07: *United as One*

最終巻の第7巻では，each otherが<sup>2</sup>27例，each other'sが1例見つかった．合計28例と出現数が増えている．one anotherは皆無であった．以下，構成員2のeach other，構成員manyのeach other，each other'sの順に見ていこう．なお，無題のprologueは三人称で語られるが<sup>3</sup>，Chapter OneからのnarrationはJohn (Number Four) とNumber Sixの2名がChapterごとに交互に担当している．

### 3.1 Each other: 構成員2

構成員が確実に2のものは11例，表面的にはmanyであるがつまるところ2のものが1例あり，計12例である．語り手Johnのところでは8例あり，構成員にJohn自らを含むものが3例ある．例文(1)では，JohnとMarinaは，救えなかったSarahについて話していたが言葉は途切れてしまう．隣り合う「連続」である：

- (1) **Both of us** fall silent, sitting next to each other on one of the infirmary's stiff cots.

[Marina & John] (145)

例 (2) は, Ra が John に見せる「夢」の中での二名である :

- (2) Setrákus Ra. He turns to face me, smiling like we just bumped into each other on the street. [Setrákus Ra & John] (201)

例 (3) は, 第 1 巻から登場していた Mark James を思い出している. これはこの巻最後の例文である :

- (3) I never got along with Mark. **We** never liked each other. [Mark & John] (439)

構成員が Five と Nine のものが 2 例ある. 例文 (4) は, Five の発言で, Four の行動について Five に話している :

- (4) “Yesterday he was doing everything he could to keep **us** from killing each other, remember?” S. [Nine & Five] (113)

例文 (5) は, 最後の戦いで敵基地入り口に侵入するが, 互いに相手より活躍しようとしている. この二人はやはり仲が悪い :

- (5) We run forward and down, BK on our heels, into the narrowing tunnel. **Nine and Five**, so eager for more combat and looking to show each other up, got way too far ahead of us. [Nine and Five] (372)

構成員が無生物のものが 3 例あり, うち 2 例が Mogadorian の戦艦である :

- (6) **The two warships** met over Kazakhstan and started blowing each other apart. [The two warships] (196)
- (7) We aren't sure if **they** destroyed each other, fought to a stalemate, or if one of them came out victorious. [The two warships] (196)

Mogadorian の攻撃が世界規模で始まり, それを John たちはモニターを通して見ている. 例文 (8) はパリの凱旋門が崩壊するところである. 重なり合いの「連続」である :

- (8) My eyes bounce from catastrophe to catastrophe, eventually settling on the Arc de Triomphe as it crumbles down the middle, **its two pillars** breaking apart against each other. [Its two pillars] (320)

語り手 Six のところには 4 例あり, Six を含むもの 1 例, 含まないもの 3 例である.

Patience Creekにある地球人の基地にきたGardeたちであるが、Samのおかげで何とかやっているとSixがSamの父親のMalcolmに言うと、MalcolmはSamの背中をたたいて例文(9)のように言う。このweは一般的にはGardeとGardeを支援してきたMalcolmやSamたちであるからmanyに分類することもできるが、Malcolmは息子Samの持つSixに対する気持ちを知っていて、とりわけていえば、SamとSixの二名について言っており、また、Samを励ましている：

- (9) “Good, good,” he says. “In times like these, **we** need to lean on each other.” S. [Six & Sam] (54)

例文(10)では、Gardeと人間の基地であるPatience Creekが襲撃され無線通信が遮断されたため、Ellaはテレパシーを使ってその基地にいるSamと連絡を取ろうとするが、うまくいかない：

- (10) **Marina and Ella** sit opposite each other. [Marina and Ella] (295)

例文(11)は、Sixが彼女の気象を操れる能力で旗艦*Anubis*に挑んでいるところであり、距離が離れると能力の効き目が薄れてしまう。もう一方の艦に乗っているSixを含むかどうかであるが、ここでは艦同士の距離とする：

- (11) To keep our camouflage up along with the attack on the *Anubis*, I need **us** to be within a few hundred yards of each other. [The *Anubis* & the warship with Six on board] (355)

最後の戦いでSixはAdamとともに透明になって敵の本拠地に侵入し、6名のMogadorianと遭遇する。MohawkとBraidsは髪型からSixが2名のMogsにつけたあだ名で、Mogadorianはこれからの戦いをどうするかで意見が二分していて、この2名がその中心者として対立している2つの「グループ」があると言える：

- (12) Suddenly, Mohawk aims his blaster at Braids’s face. She follows suit. In a matter of seconds, **they**’re all pointing guns at each other, still yelling harsh words in Mogadorian. [The six Mogadorians in the control room] (383)

### 3.2 Each other: 構成員 many

構成員 many の each other は15例である。語り手Johnに9例、Sixに6例である。

語り手を構成員に含むものは John に 1 例, Six に 1 例ある。

例 (1) は John, Six, Adam の 3 名で, 敵の戦艦を奪うために潜入し, Six の能力で透明になっている。Mogs に気づかれないように John は telepathy で Six に話しかける:

(1) *Six, do you have Adam? I ask telepathically.*

I feel Six's arm tense on my shoulders as I speak in her mind. She shifts position, presumably so she can get a better grip on the Mogadorian, which isn't exactly easy since **none of us** can see each other. [John, Six, Adam] (229)

Mogadorian は少子化に悩んでおり, それを解決しようと Ra が人工的に生み出したものが vatborn と呼ばれ, 前線の兵士は皆 vatborn である。彼らは, 倒されると分解して灰になる。例文 (2) は, 敵の戦艦内部の兵舎に足を踏み入れたところで, その部屋の壁全体が蜂の巣のようになっていてその一つ一つに vatborn の兵士のベッドがある。重なり合いの「連続」である:

(2) The first area I step into looks like a barracks. The walls are honeycombed, with narrow pill-shaped beds. **The vatborn** basically sleep right on top of each other. [The vatborn] (234)

例 (3) では, John は兵舎を破壊した後, 敵兵士たちに同士討ちをさせた。「それぞれ」である。「それぞれ」は (3) から (8) まで計 6 例ある:

(3) Quickly, I turn invisible again and fly up, over their blaster fire. **They** end up shredding each other in the crossfire. [The vatborn soldiers] (236)

普通に出生する Mogadorian は vatborn に対して trueborn と呼ばれ, vatborn を指揮する側に立つ。例文 (4) は, Ra が倒された場合 Mogadorian はどうするのかという間に Adam が答えている。「それぞれ」である:

(4) “First, the trueborn decide **who's** strongest by blowing each other up with Earth as their battlefield.” S. [The trueborn] (84)

例文 (5)–(7) は, Patience Creek の基地で, 人間側も Mogadorian の動向を探ろうと Mogadorian の通信を傍受しているところである。「それぞれ」である:

(5) The small room is filled with the harsh and guttural sounds of **Mogadorians**

barking at each other. [Mogadorians] (86)

- (6) “This is good. It’ll be really helpful to know what the **Mogs** are saying to each other,” I tell them, putting a hand on Adam’s shoulder. S. [The Mogadorians] (89)
- (7) If **they** took out each other, that’d make it a whole lot easier on the rest of us. [Mogadorians] (90)

例文(8)では、JohnたちはMogadorianの基地入り口にて基地侵入を目指している。「それぞれ」である：

- (8) With the chaos created by Lexa’s departure, the explosions overhead and the fact that they’re all crammed together in front of the cavern entrance, **the Mogs** are just as likely to hit each other as they are to hit us. [The Mogadorians] (367)

Johnからの最後の例文(9)は、epilogueにあたる「1年後」の世界で、「能力」を得た地球人たち(LANES<sup>9</sup>)をJohnたちが訓練しているところである。相互代名詞直後の“pairs of them”で2名ほどのグループがいくつかあることが分かる。「近隣グループ」である：

- (9) In an outsize gymnasium, **a handful of kids** practice their telekinesis with each other. Pairs of them toss footballs back and forth without using their hands, and, every time a whistle blows, they add another ball to the mix. [A handful of kids] (426)

語り手Sixのものは6例ある。うち4例がSpeechで、Speechの確率が高い。自分を含むものはグループの一員として1例ある。Patience Creekの地球人(米国人)基地では、地球人軍とGardeたちはお互いに出方を伺っている。地球軍の将軍Lawsonは、例文(10)のようにJohnをはじめとしたGardeに提案するが、自分達が指揮権を握ろうとしているのは明らかである。Gardeたちと地球軍という2つの「グループ」の対立である。なお、通常主語にならないはずのeach otherが主語の位置にある：

- (10) “It would be ideal if **we** knew what each other was doing.” S. [Garde and

---

9 地球人たちはhuman GardeをLANEと呼ぶ。Legacy-Augmented Native Earthling (公式名称)またはLegacy-Afflicted Native Earthling (一般名称)の略称である。

LANEs, & the humans led by Lawson] (183)

例文 (11) – (13) は、Mogadorian たちの「それぞれ」である：

(11) “They don’t know what the hell they’re doing. With Setrákus Ra out of commission, **they**’re all just yelling at each other.” S. [Mogdorians] (152)

(12) Immediately, the dozens of warship captains **who** have been listening to this entire exchange begin to shout at each other. [Mogadorian warship captains] (193)

(13) “Now,” he says. “We let **them** kill each other.” S. [Mogadorian warship captains or Mogadorians] (193)

例文 (14) では、3.1 (12) の状況で Six が 6 名の trueborn の持つ銃 (blaster) のうち 2 丁を暴発させ、同士討ちに持ち込む。「それぞれ」ないし Mohawk と Braid を中心とする 2 つの「グループ」または「代表」が考えられる：

(14) **The trueborn** do the rest, screaming with rage and firing into each other. [The trueborn] (383)

例文 (15) は、5 名の human Garde (LANEs: Nigel, Fleur, Bertrand, Ran, Daniela) がいて、2, 3 名のグループに分かれて「能力」の特訓をするところである。「近隣グループ」である：

(15) Catching a look from John, Nine walks down the line of human Garde, handing out unloaded weapons. “Practice on each other,” he says. “I’ll be back later, and I expect your badass quotient increased by, like, tenfold.” S. [Human Garde, i.e. LANEs] (215)

### 3.3 Each other’s

所有格の each other’s は many で 1 例だけで限定用法である。

例文 (1) では、John は作戦を練っている。Setrákus Ra を倒せば戦いが終わる。しかし、彼は強い。そうではなく、Mogadorian たちに同士討ちをさせたらどうか。「それぞれ」である：

(1) To get **the Mogs** at each other’s throats before Setrákus Ra is even turned to ash? [The Mogadorians] (90)

### 3.4 まとめ

所有格の1例を含めた each other は28例で、one another は現れないが、前2巻よりも10例ほど増えている。Five の合流により Garde の連帯に乱れが生じたせいか第4－6巻では相互代名詞の出現数が減少していたが、最終巻では、Five も Ra と闘うことにより連帯感が少しもどった形になっている。構成員2のものが12例、many のものが16例と3対4で many のものが多い。

語り手 John を含むものが4例、Six を含むものが2例である。Speech は構成員2で2例、many で5例である。

構成員が無生物のものは4例 (3.1 (6), (7), (8), (11)) で構成員数はすべて2である。出現率は、449 ページで、each other が 16.04 (449/28) である。

## 4. Conclusion

第5, 6, 7巻の所有格を含めた出現数の合計はeach other が60例、one another が2例で、ほとんどeach other である。出現率は、総ページ数 1219 で、each other が 20.32 (1219/60)、one another が 609.5 (1219/2)、両者計 19.66 (1219/62) である。全7巻の出現率を挙げると、総ページ数2425で、each other が 15.54 (2425/156)、one another が 73.48 (2425/33)、両者計 12.83 (2425/189) である。

構成員数については、each other は2のものが28例、many のものが32例であり、構成員数による使い分けは見られない。例文が2例と少ないone another は両方とも many である。(ただし、one another の構成員数を全巻で見ると、2 が9例、2 or more が1例、many が23例となり、構成員2でも問題なく使われている。)

Speech 中のものは12例でうち2例が発話者を含んでいるが、narration 部分の使用の1/5である。また、narration の語り手を含むものは14例である。

構成員が無生物のものは、each other で6例、one another で1例である。

主語にならないはずの each other が主語の位置にある非常に珍しい例が1例見つけた (3.2 (10))。

最後に、相互代名詞の用法の分類を本稿の例文とともに整理しておく。

「連続」：「重なり合い」を含む。構成員2の場合もある。例文は、1.1 (6), (7); 1.2

(1), (2), (5), (7), (8); 2.4 (1); 3.1 (1), (8); 3.2 (2).

「グループ」：構成員の中に対立する2つ以上のグループが存在する。複数あるグループの少なくとも1つのグループの構成員が複数であれば他のグループの構成員は1でも良い。例文は，2.2 (4); 3.1 (12); 3.2 (10), (14).

「代表」：「グループ」の一種であるが，あるグループ内の特定の構成員が他のグループ内の特定の構成員と関係する。グループ内の全員が代表となる場合も1の場合もある。例文は，1.2 (3); 2.2 (4); 2.3 (1); 3.2 (14).

「近隣グループ」：構成員内で複数のグループが結成される。「グループ」と異なり，グループ対グループではなく，そのグループ内の関係になるが，グループの範囲はあいまいであることが多い。松島（2016a）までは「三々五々 (in twos and threes)」としていたものである。例文は，1.3 (1); 3.2 (9), (15).

「それぞれ」：構成員同士が不特定に関係する。関係しない構成員同士もいる可能性がある。例文は，1.2 (6); 2.2 (1), (2), (3), (5), (6); 3.2 (3), (4), (5), (6), (7), (8), (11), (12), (13); 3.3 (1).

#### Bibliography

Lore, Pittacus. 2014. *The Revenge of Seven*. New York: Harper.

Lore, Pittacus. 2015. *The Fate of Ten*. New York: Harper.

Lore, Pittacus. 2016. *United as One*. New York: Harper.

松島 龍太郎. 2013a. 「each other と one another の語法：お互いに交換可能か」. 『英語英文学研究』第72号（第37巻第2号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2013b. 「each other と one another の語法 (2)：Harry Potter の場合」. 『英語英文学研究』第73号（第38巻第1号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2014a. 「each other と one another の語法 (3)：Hobbit の場合」. 『英語英文学研究』第74号（第38巻第2号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2014b. 「each other と one another の語法 (4)：The Hunger Games の場合」. 『英語英文学研究』第75号（第39巻第1号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2015a. 「each other と one another の語法 (5)：I Am Number Four の場合」. 『英語英文学研究』第76号（第39巻第2号）：創価大学英文学会.



- 松島 龍太郎. 2015b. 「each other と one another の語法 (6): *Howl's Moving Castle* の場合」.  
『英語英文学研究』第77号（第40巻第1号）：創価大学英文学会.
- 松島 龍太郎. 2016a. 「each other と one another の語法 (7): *The Underworld Chronicles*  
の場合」. 『英語英文学研究』第78号（第40巻第2号）：創価大学英文学会.
- 松島 龍太郎. 2016b. 「each other と one another の語法 (8): *Penryn & the End of Days* の  
場合」. 『英語英文学研究』第79号（第41巻第1号）：創価大学英文学会.



# *Longman Dictionary of Contemporary English*

## 第6版の‘functional language’の分析

### —モダリティ表現について—

藤本 和子

1 学習者用英英辞典の *Longman Dictionary of Contemporary English* 第6版（以下 *LDOCE6*）が2014年に出版された。辞典は、言語の変化を反映すべく改訂されていくが、特に学習者用辞典にあっては、言語の変化はもちろんのこと、学習者の必要性や英語教育をめぐる時代の要請を把握して、学習者に役立つ辞典であるための工夫が求められる。グローバル化時代において、英語教育がますます重要視され、日本の中学校、高等学校の学習指導要領にも、外国語の目標として、「コミュニケーション能力」の養成が掲げられており、母語話者大規模コーパスや学習者コーパスの分析に基づいて編纂された学習者用辞典が、英語教育において担う役割は大きい。例えば、コーパス分析により、実際の言語使用に基づいた、レジスター（言語使用域）による適切な言語表現の提示が可能になり、日常の言語使用場面におけるコミュニケーション活動に役立つ情報を辞典に盛り込むことができる。<sup>1</sup>

本稿では、*LDOCE6* の中央ページに設けられたセクション *Formality in spoken and written English* で扱われている ‘functional language’ を分析する。日常生活の言語の使用場面で、それぞれの言語の働きのために使用される言語表現について、モダリティ表現の中から、助動詞と副詞に焦点を絞り、それらがどのように使用されているかについて調べ、その結果から、学習者のコミュニケーション活動のための表現指導について示唆を得ることを目的とする。

1 *LDOCE6* のレジスターは、informal, formal, spoken, literary, legal, technical などである（*LDOCE6*, p. xi 参照）。

モダリティの定義として、Carter et al. (2011) には、'Modality is about a speaker's or a writer's attitude towards the world. A speaker or writer can express certainty, possibility, willingness, obligation, necessity and ability by using modal words and expressions' (p. 288). とある。モダリティとは、話し手、書き手の物事に対する態度について言い、確実性や可能性などを表すために、助動詞や副詞などのモダリティ表現が用いられる。

2 まず、LDOCE6 の主な特徴について簡潔に見ておこう。LDOCEの初版は1978年に出版されており、およそ35年の間に改版を重ね、第6版に至っている。LDOCE6 には、'The starting point for any Longman dictionary is research. Research with both students and teachers' (p. viii). とあるように、英語学習者と英語指導者の両方の必要性や意見を反映しながら改訂を行うという編纂方針が記述されている。LDOCE6 が対象とする学習者レベルは、CEFR 基準のB2からC2レベルである。<sup>2</sup>

Longman社が出版する辞典は、the Longman Corpus Networkと呼ばれる、書籍、新聞、会話、広告などイギリス英語とアメリカ英語の書き言葉と話し言葉の両方からなる現在3億9,000万語のデータベースに基づいて編纂され、実際に使用されている自然な英語を掲載することを目的としている (LDOCE6, p. xii)。コーパスには、the Longman Learners' Corpusも使用されており、学習者の犯しやすい誤りや英語使用傾向の分析結果が辞典編纂に活かされている。このコーパスは、世界中の英語学習者から収集された書き言葉1,000万語を超えるものである (LDOCE6, p. xii)。

LDOCE6 には、230,000の語(句)と意味、165,000のコーパスに基づく用例、65,000以上のコロケーション、18,000を超える同意語、反意語などが掲載されている。LDOCE6 からは、新たな完全Online版が登場し、紙媒体の本体よりもさらに多くの語(句)や用例などを掲載している。<sup>3</sup> 本稿では、紙媒体の本体に絞っ

2 Pearson English Language Teaching JAPAN・2017. 2017. Japan: Pearson Japan KK. p. 37 参照。

3 LDOCE6のOnline版には、300,000の語(句)と意味、88,000の発音を伴う用例及び、100万のコーパスからの用例、147,000のコロケーション、48,000の同意語、反意語などが掲載されている。LONGMAN Dictionaries Online. <http://global.longmandictionaries.com/> にてアクセス可能。

て分析を行う。

LDOCE6 は、従来の特徴を維持しながらも、<sup>4</sup> 語彙と文法についての情報をさらに充実させている。語彙に関しては、英語学習において最も重要な語とされる3,000語の the *Longman Communication 3000* を含む9,000語の the *Longman Communication 9000* に基づく語の頻度情報が、LDOCE6 において新たに導入された。<sup>5</sup> LDOCE6 には、従来の3,000語と新たな9,000語について以下の説明がある。

Longman dictionaries have traditionally highlighted the 3000 most frequent words in English, so that learners know which words they need to learn first. These 3000 words enable you to understand 86% of the language. In order to understand a wide variety of authentic texts, however, research into vocabulary acquisition has shown that you may need to know as many as 8000-9000 word families. (p. 2126)

従来の3,000語は、最も頻度が高く、学習者が優先して習得する必要があるものであり、さらなる英語理解のためには、8,000-9,000の word family を習得することが必要であることが分かる。この the *Longman Communication 9000* の語の見出し語は、他の見出し語が青色であるのに対して、赤色となっており、学習者が気づきやすいように工夫がなされている。それぞれの見出し語には、頻度情報として、●●●は、9,000語の中で、頻度の最も高い3,000語、●●○は、3,000語から6,000語、●○○は、6,000語から9,000語の中に入ることが示されている。さらに、LDOCE6 においても受け継がれているのは、使用頻度上位3,000語には、話し言葉と書き言葉の使用頻度情報が、**S1**、**S2**、**S3**、**W1**、**W2**、**W3** のように記されている。**S1**、**W1** は、話し言葉あるいは書き言葉において、使用頻度上位1,000語、**S2**、**W2** は、上位1,000語から2,000語、**S3**、**W3** は、上位2,000語から3,000語に入ることを表している。<sup>6</sup> 主要な上級学習者用英英辞典が、それ

4 詳細は、LDOCE6 (pp. x-xiii) の 'How to use the Dictionary' を参照のこと。

5 The *Longman Communication 9000* のすべての語が掲載されているリストは、ウェブサイト [www.longmandictionaries.com](http://www.longmandictionaries.com) で閲覧可能である。

6 詳細は、LDOCE6, p. 2126 参照のこと。

ぞれ独自のコーパスに基づき、頻度情報を提示しているが、上記のような話し言葉と書き言葉のそれぞれの頻度情報を明示しているのは、現在のところ *LDOCE* のみである。これらの語の頻度情報は、学習者の語彙習得の参考になり、学習者が、実際のコミュニケーションにおける自然な英語使用を習得するのに大いに役立つと言える。

次に、*LDOCE6* では、辞典本体中央部 (pp. A17-A48) に、文法情報として、Grammar Guide が設けられた。辞典中央部の文法に関するセクションは、*LDOCE4* (pp. 971-975) の Language Notes を拡充させたものとも言えようか。*LDOCE4* では、文法項目として、Articles、Modal verbs、Phrasal verbs が扱われているが、*LDOCE5* では、文法セクションは辞典中央部から姿を消した。*LDOCE6* において、Grammar Guide として再び、辞典中央部に文法セクションが設けられたことになる。*LDOCE6* では、Adjectives、Adverbs、Nouns、Verbs、Prepositions の5つの文法項目が扱われている。<sup>7</sup> 本稿では、モダリティ表現について、助動詞と副詞について分析することから、5つの文法項目のうち、参考までに、Adverbs と Modal verbs を含む Verbs の内容を Table 1 に記しておこう。

---

<sup>7</sup> 文法を実際に活用できることを目指して、文法練習がオンライン ([www.longmandictionaries.com](http://www.longmandictionaries.com)) ができる。

Table 1: Grammar Guide: Adverbs と Verbs の内容

Adverbs	Verbs
Adverbs of frequency	Transitive and intransitive verbs
Adverbs of manner	Verb patterns
Adverbs of place	Modal verbs
Adverbs of time	Phrasal verbs
Adverbs of certainty	Short responses
Adverbs of degree	Using the continuous (progressive) form of verbs
	Using the passive
	Using the subjunctive
	Conditionals
	Talking about the future
	Reported speech

さらに、辞典本体中央部 (pp. A1-A16) には、Formality in spoken and written English についてのセクションが設けられている。このセクションは、*LDOCE6* で新たに設けられたものではなく、*LDOCE5* に始まり、*LDOCE6* に受け継がれている。*LDOCE6* において、記述の明瞭さのために一部加筆がなされた箇所があるが、内容は *LDOCE5* と同じである。*LDOCE6* の Formality in spoken and written English セクションは、同じあるいは似たような意味をもつ語（句）が、formal speech, formal writing, informal speech, informal writing のいずれにおいて、より適切に用いられるかについて情報を提示している。つまり、話し言葉と書き言葉について、それぞれの formality に合わせた適切な英語表現が掲載されている。*LDOCE5* と *LDOCE6* の Formality in spoken and written English は、*LDOCE4* (pp. 982-985) の Language Notes の中の Pragmatics を発展させたものとも言えようか。

このように、語彙と文法の記述を充実させ、学習者が文法的に正しいというのみでなく、話し言葉と書き言葉について、formality の違いに応じて適切な英語表現を使用できるよう編集に工夫がなされている。語彙、文法、そして、日常生活の場面に応じた適切な表現を習得することは、実践的コミュニケーションを目指すために必要なことである。

3 ここからは、*LDOCE6* の Formality in spoken and written English セクションを分析する。このセクションは、functional language に関するものであり、functional language の定義は、*LDOCE6* において、'language that you use to do something, such as agreeing with someone or asking someone to do something for you' (p. A1) となされている。定義中の agreeing を含め、以下の9項目が設定され、それぞれの項目について、'in everyday English' や、'in formal English' などのパートが設けられ、formality の違いによる表現を提示している。最初の項目 Agreeing には4つのパート in everyday English、in formal English、strongly agreeing、partly agreeing がある。

(1) Agreeing

in everyday English/in formal English/strongly agreeing/partly agreeing

(2) Disagreeing

in everyday English/in formal English/politely disagreeing/strongly disagreeing

(3) Apologizing

in everyday English/in formal English/replying to an apology

(4) Opinions

in everyday English/in formal written English

(5) Requests

asking someone to do something in everyday English/more formal ways of asking someone to do something/asking for permission in everyday English/more formal ways of asking for permission

(6) Suggestions

in everyday English/less direct ways of making suggestions



(7) Hello

in spoken English

(8) Goodbye

in spoken English/in emails and informal letters/in formal letters and emails

(9) Thank you

in everyday English/in more formal English/replying when someone says thank you

これらの9項目には、『中学校学習指導要領』（第2 各言語の目標及び内容等 2 内容 (2) 言語活動の取扱い）と『高等学校学習指導要領』（第3款 英語に関する各科目に共通する内容等1）に記述されている「言語の使用場面の例」と「言語の働きの例」の中の、「言語の働きの例」と重なるものもある。詳細は3.1で述べることにする。

3.1 *LDOCE6* は、上級英語学習者用辞典であるため、『中学校学習指導要領』ではなく、『高等学校学習指導要領』の記述に照らして分析する。Table 2は、『高等学校学習指導要領』の「言語の働きの例」全30項目と*LDOCE6* のFormality in spoken and written Englishセクションの9項目を、『高等学校学習指導要領』の「言語の働きの例」の日本語及び『高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）』の英語をもとに対応させたものである。『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』には、「言語の働きの例」の言語表現例が提示されていないため、用例を比較して*LDOCE6* のFormality in spoken and written Englishセクションの項目と対応させることができない。したがって、あくまでも大まかな対応を表すものである。

Table 2: 『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」と LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション中の項目

『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」	LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション中の項目
<b>a コミュニケーションを円滑にする (Facilitating communication)</b>	
相づちを打つ (Nodding)	
聞き直す (Asking for repetition)	
繰り返す (Repeating)	
言い換える (Paraphrasing)	
話題を発展させる (Developing a topic)	
話題を変える (Changing topics)	
<b>b 気持ちを伝える (Expressing emotions)</b>	
褒める (Praising)	
謝る (Apologizing)	Apologizing
感謝する (Expressing gratitude)	Thank you
望む (Expressing desire)	
驚く (Expressing surprise)	
心配する (Expressing concern)	
<b>c 情報を伝える (Transmitting information)</b>	
説明する (Explaining)	
報告する (Reporting)	
描写する (Describing)	
理由を述べる (Reasoning)	
要約する (Summarizing)	
訂正する (Correcting)	
<b>d 考えや意図を伝える (Expressing opinions and intentions)</b>	
申し出る (Offering)	
賛成する (Agreeing)	Agreeing
反対する (Disagreeing)	Disagreeing
主張する (Asserting)	Opinions
推論する (Inferring)	Opinions
仮定する (Assuming)	
<b>e 相手の行動を促す (Instigating action)</b>	
依頼する (Requesting)	Requests
誘う (Inviting)	
許可する (Permitting)	
助言する (Advising)	Suggestions
命令する (Giving orders)	
注意を引く (Calling attention)	

注) 『高等学校学習指導要領』の英訳は、『高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）』の

ものである。*LDOCE6* の Requests は、asking someone to do something と asking for permission の2つの場合が設定されている。

*LDOCE6* は、大きく9つの言語機能を提示し、9項目中、7項目が、『高等学校学習指導要領』の「言語の働きの例」と関連している。Opinionsに関しては、言語表現リストと例文から、『高等学校学習指導要領』の「考えや意図を伝える (Expressing opinions and intentions)」の中の、「主張する」と「推論する」に該当させた。*LDOCE6* の Hello と Goodbye に対応する項目は、『高等学校学習指導要領』にはない。*LDOCE6* の7項目は、『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」の「b 気持ちを伝える」、「d 考えや意図を伝える」、「e 相手の行動を促す」の中の項目と関連していることが分かる。

3.2 *LDOCE6* の Formality in spoken and written English セクションで提示されている言語表現を含む例文からデータセットを作成し、助動詞と副詞の頻度を見てみよう。ソフトウェアは、AntConc<sup>8</sup> を用いて分析する。このデータセットの Word Tokens は3,165、Word Types は880である。<sup>9</sup> Table 3 には、AntConc の Word List ツールにより、使用頻度の高い順に50の語が示されている。Table 3 は分析結果をそのまま掲載しているため、語の表示方法について説明をしておきたい。語の頻度が同じである場合、順位はアルファベット順となっている。第1位の i は、例文中ではすべて大文字である。第6位の s と第32位の m は、動詞、助動詞の短縮形及び、s には、Let's の省略された us の s や所有格's の s、m には、例文中のアルファベット M も含まれる。第12位 n、13位 t は、否定の短縮形の一部である。

8 Anthony, L. 2014. AntConc (Version 3.4.3) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available online at <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>

9 データセットは例文から作成しており、Formality in spoken and written English セクションでリストアップされている言語表現は含まれていないため、例えば、言語表現として掲載されていても、その表現を用いた例文が掲載されていない場合、このデータセットに入っていない。例えば、Agreeing 中の言語表現 **I totally agree!** には例文がないため、この表現はデータセットに含まれていない。

Table 3: LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション例文中の語の頻度

Rank	Frequency	Word	Rank	Frequency	Word
1	139	i	26	22	think
2	121	you	27	22	would
3	120	the	28	21	as
4	79	to	29	21	this
5	59	that	30	19	about
6	57	s	31	19	and
7	56	a	32	19	m
8	53	for	33	18	have
9	51	it	34	18	my
10	44	of	35	18	should
11	36	is	36	17	could
12	35	n	37	17	not
13	35	t	38	16	was
14	32	in	39	15	can
15	31	do	40	15	some
16	29	we	41	15	what
17	29	your	42	14	so
18	24	on	43	14	sorry
19	24	with	44	13	but
20	23	are	45	12	see
21	23	be	46	11	at
22	23	he	47	11	good
23	23	if	48	11	our
24	23	me	49	11	there
25	22	all	50	11	they

Table 3 の上位 50 位の中には、助動詞 would (第 27 位、頻度 22)、should (第 35 位、頻度 18)、could (第 36 位、頻度 17)、can (第 39 位、頻度 15) が含まれる。副詞は、Biber et al. (1999: 767) における、‘single adverbs’ や、副詞の働きをする ‘single nouns’ は、上位 50 位の中には見られない。Would の短縮形 ‘d が第 127 位、頻度 4 であるため、would/’d は頻度 26 となり、厳密には、第 18 位となる。以下、3.2.1

において助動詞、3.2.2で副詞について分析してみよう。

3.2.1 LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション例文中で用いられ、使用頻度が全体の上位50位に入っている4つの助動詞のうち、本稿では、助動詞の過去形の would/'d (頻度26)、should (頻度18)、could (頻度17)について、これらが用いられている項目と意味を分析してみよう（分析の順は、Table 3の順位による）。

Tables 4-6は、would/'d、should、could の、Formality in spoken and written English セクション中の項目別の使用順位である。Would/'dは、第1位は、Requests において10件(38.5%)、第2位、Disagreeing 7件(26.9%)、第3位、Suggestions 3件(11.5%)であり、第1位と第2位の Requests と Disagreeing で65.4%となり6割を超える。Shouldは、第1位が、Opinions 8件(44.4%)、第2位、Disagreeing 5件(27.8%)、第3位、Agreeing 3件(16.7%)である。第1位の Opinions のみで5割近くを占めている。Couldは、第1位が、Requests 10件(58.8%)、第2位、Suggestions 4件(23.5%)、第3位は、Agreeing、Opinions、Hello において、それぞれ1件ずつ(各5.9%)である。第1位の Requests において6割近く使用されている。Would/'d と could は、いずれも第1位が、Requests であり、Suggestions も would/'d は第3位、could は第2位で順位は異なるが上位3位に入っている。これらの助動詞が依頼や提案をする場合に用いられていることが分かる。Requests と Suggestions は、『高等学校学習指導要領』『言語の働きの例』の「e 相手の行動を促す」に含まれ、would/'d の第2位の Disagreeing と could の第3位の Agreeing は、『高等学校学習指導要領』『言語の働きの例』の「d 考えや意図を伝える」に含まれる。Should について、would/'d と could との顕著な違いは、第1位の Opinions において、would/'d と could と比較して、使用頻度が高いことである。Opinions と、第2位の Disagreeing、第3位の Agreeing は、『高等学校学習指導要領』『言語の働きの例』の「d 考えや意図を伝える」に含まれる。

Table 4: Formality in spoken and written English セクション中の項目別 would/’d の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Requests	10	38.5
2	Disagreeing	7	26.9
3	Suggestions	3	11.5
4	Agreeing	2	7.7
5	Apologizing	1	3.8
5	Opinions	1	3.8
5	Hello	1	3.8
5	Thank you	1	3.8
	Total	26	100.0

Table 5: Formality in spoken and written English セクション中の項目別 should の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Opinions	8	44.4
2	Disagreeing	5	27.8
3	Agreeing	3	16.7
4	Apologizing	1	5.6
4	Suggestions	1	5.6
	Total	18	100.0

Table 6: Formality in spoken and written English セクション中の項目別 could の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Requests	10	58.8
2	Suggestions	4	23.5
3	Agreeing	1	5.9
3	Opinions	1	5.9
3	Hello	1	5.9
	Total	17	100.0

次に、would/’d、should、couldの意味を分類してみよう。助動詞の意味は、文脈により複数の解釈がありうるなど、明確な分類は難しい場合があるが、ここで

は、用例から読み取ることのできる情報と Formality in spoken and written English セクションの項目名をもとに分類を試みた。意味を表す日本語は『ジーニアス英和辞典 第5版』を参考にする。Tables 7-9 は、これらの3つの助動詞の意味の分析結果をまとめたものである。

Table 7: Formality in spoken and written English セクション中の would/'d の意味

Rank	Meanings	Frequency	%
1	意思	8	30.8
2	丁寧な依頼・勧誘	7	26.9
2	可能性・推量	7	26.9
4	控え目な希望・考え	4	15.4
	Total	26	100.0

Table 8: Formality in spoken and written English セクション中の should の意味

Rank	Meanings	Frequency	%
1	義務・助言	18	100.0
	Total	18	100.0

Table 9: Formality in spoken and written English セクション中の could の意味

Rank	Meanings	Frequency	%
1	丁寧な依頼・提案・命令	11	64.7
2	許可（丁寧な表現）	4	23.5
3	可能性・推量	1	5.9
3	能力	1	5.9
	Total	17	100.0

Would/'d の意味は、第1位が「意思」、第2位は、「丁寧な依頼・勧誘」と「可能性・推量」である。Should の例文中の意味は、すべて「義務・助言」である。Should の18件のうち、8件(44.4%)が Opinions を表す例文中で用いられていることも理由の一つとして考えられる。Could の意味は、第1位が「丁寧な依頼・提案・命令」、第2位、「許可（丁寧な表現）」、第3位、「可能性・推量」及び「能力」である。Would/'d と could には、慣用表現として学習者になじみのある表現が見受けられ

る。例えば、would/'d like to、would you...?、would you mind...?、could I...?、could you...?などである。

助動詞の意味の分類は、これまで様々な分類法が論じられている。ここでは、Biber et al. (1999: 485)の2つの大きな意味カテゴリーにしたがって論を進めていこう。助動詞は、intrinsicとextrinsicの2つのタイプの意味をもつ。Biber et al. は、前者にdeontic、後者にepistemicという用語が使用されることもあるとしている。いわゆる「義務的意味」と「認識的意味」と呼ばれるものである。Intrinsicのタイプには、permission、obligation、volition (or intention)の意味があり、extrinsicのタイプには、possibility、necessity、predictionの意味が含まれる。

LDOCE6 Formality in spoken and written Englishセクション例文中の助動詞、would/'d、should、couldのうち、shouldはすべての例文中で、「義務・助言」の意味、つまり、intrinsic meaningをもっている。Would/'dとcouldは、例文により、intrinsicとextrinsicのいずれの意味も見られる。

次に、これら3つの助動詞が例文中で表す時に注目してみよう。Shouldは、shallの過去形ではない。Would/'dとcouldに関しては、過去を表すwouldの用例はなく、couldは、17例中、1例に時制の一致の用法が見られる (*For Ruskin, art was something that could not be produced using machines.*)。つまり、このcouldの1件を除いて、用例中のすべてのwould/'d、should、couldは、現在あるいは未来について表している。いくつか例を挙げてみよう。

- a) I *would* dispute the idea that violent images on television cause people to commit acts of violence. [Disagreeing]
- b) *Would* it be possible for you to come in for an interview some time next week?  
[Requests]
- c) Is there any way you *could* change the date of the meeting? [Requests]
- d) You *could* always ask someone to record the programme for you. [Suggestions]

Biber et al. (1999)は、助動詞の主な機能について、'... relating to speaker stance



rather than the marking of time distinctions. For example, modals associated with past time are also associated with hypothetical situations, conveying overtones of tentativeness and politeness . . . . For this reason, we regard modal verbs as unmarked for tense' (p. 485). のように述べ、*Could I sit here a minute, Joyce? / Could you sign one of these too? Would you mind?* のような例文を挙げている。さらに、Carter et al. (2011) には、助動詞の過去形について、'We often use the past forms to be more polite or formal, or less direct' (p. 296). とあり、*Could you just have a quick look at the pasta? / Would you find me another pen? / You might want to change the formatting.* のような例が見られる。助動詞の過去形が不確かさや丁寧さを表すことができ、話し手、書き手の事柄に対する態度を表すことができる。話し手、書き手の確信度に応じた表現法を学ぶことにより、学習者は、断定的、直接的な表現を不適切に用いてしまうことを避けることができる。<sup>10</sup>

LDOCE6 の Formality in spoken and written English セクションの、助動詞の過去形を含む言語表現について、以下の注記を挙げておこう。

[T]hese phrases [**could you/would you/do you think you could**] sound more polite than **can you** or **will you**. You use them especially when talking to people you do not know well, or when asking someone to do something difficult or important . . . (p. A10).

[C]**ould you possibly / is there any way you could** used when asking someone to do something that is likely to be difficult or inconvenient for them, when you think the answer could easily be 'no' . . . (p. A10).

これらの記述から、助動詞の過去形を含む言語表現は、丁寧な表現となり、あまり親しくない人に依頼をする場合、依頼によって相手にかける負担が大きい時や、相手からの承諾が期待しにくい場合などに用いられることが分かる。

---

10 学習者の助動詞使用について、Folse (2009: 231) などを参照のこと。

藤本(2016)は、『高等学校学習指導要領解説』（英語に関する各科目に共通する内容等 2）の言語材料の1つである文法事項の助動詞についての記述に照らし、助動詞の過去形が、「可能性・推量」のような現在や未来を表す用法について、学習者のレベルに配慮しつつ、高校生、大学生に指導をすることにより、物事に対する確信度に応じた表現活動ができるようになることは、学習者のより効果的なコミュニケーション活動につながることを述べた。

『高等学校学習指導要領解説』（英語に関する各科目に共通する内容等 2）の助動詞に関する記述を引用する。

助動詞の代表的なものは、can, may, must, will などである。これらは、話し手の心的態度を表す重要な表現であり、丁寧な依頼などに不可欠である。中学校では慣用表現以外では過去形を指導しないが、高等学校では必要に応じて過去形も指導する。（下線筆者）

『高等学校学習指導要領解説』には、助動詞の指導について、「高等学校では必要に応じて過去形も指導する」とあり、指導しなければならないとは記述されていない。しかしながら、LDOCE6 の Formality in spoken and written English セクションの分析結果から判断して、助動詞の過去形が、現在・未来について表すことができ、後者の用法が、物事に対する確信度や、丁寧さを表すこともできることを指導することは、学習者がより効果的なコミュニケーション活動を行うことができることにつながると考える。

Cater (2011) は助動詞の形態とそれらが表す時について、'All of the modal verbs [can, could, may, might, will, shall, would, should and must] can refer to present and future time. Only some of them [could, might, would and should] can refer to past time' (p. 295). と記述している。このように、助動詞が、過去形であっても現在と未来のことを表すことができることを、学習者に分かりやすく指導する工夫が必要であろう。

3.2.2 次に、*LDOCE6* Formality in spoken and written English セクション 例文中の副詞について分析してみよう。副詞は、その意味により、複数のカテゴリーに分類されるが、本稿では、Biber et al. (1999: 552-560) の分類のうち、stance adverbs の中の epistemic meanings（認識的意味）をもつ epistemic stance adverbs について調べてみよう。<sup>11</sup> Epistemic stance adverbials について、Biber et al. (1999) は、  
'... express the speaker's judgment about the certainty, reliability, and limitations of the proposition ... can also comment on the source of the information' (p. 854). のように記述している。

調査する副詞は、Biber et al. (1999: 869) の 'most common stance adverbials' とされる以下の14の副詞である。<sup>12</sup>

**epistemic—doubt/certainty**

probably / maybe / perhaps / of course / certainly / definitely

**epistemic—actuality**

really / actually / in fact

**epistemic—imprecision**

like / sort of / kind of

**epistemic—source of information**

according to + NP

**epistemic—limitation/perspective**

generally

---

11 Biber et al. (1999) は、副詞を意味により、8つの主たるカテゴリーに分類している。つまり、place, time, manner, degree, additive/restrictive, stance, linking, other meanings である。Stance adverbs は、さらに3つのカテゴリー (epistemic, attitude, style) に分類されている。

12 Adverbs と adverbials の区別は、Biber et al. (1999: 538) を参照のこと。本稿では、両者を副詞と呼ぶことにする。

Table 10は、*LDOCE6* Formality in spoken and written English セクションの例文中で用いられている副詞の頻度をまとめたものである。Really の総件数は、10件であるが、このうち8件は、形容詞を強調するもの (e.g. *'It's really hot today.'* *'I know - I wish I hadn't worn my sweater.'* [Agreeing]) を含め、stance adverbではなく、degree adverbであるため、それらを除いてある。

Table 10: *LDOCE6* Formality in spoken and written English セクション例文中の epistemic stance adverbials

Epistemic stance adverbials	Frequency
<b>epistemic — doubt/certainty</b>	
probably	0
maybe	1
perhaps	1
of course	1
certainly	0
definitely	1
<b>epistemic — actuality</b>	
really	2
actually	0
in fact	0
<b>epistemic — imprecision</b>	
like	0
sort of	0
kind of	0
<b>epistemic — source of information</b>	
according to + NP	2
<b>epistemic — limitation/perspective</b>	
generally	1
Total	9

Table 11は、Formality in spoken and written English セクション例文中で用いられている認識的意味をもつ副詞が、どのような言語の働きの場合に用いられているのかについて表している。これらの副詞が、Suggestions、Disagreeing、Agreeing、Opinionsで用いられていることが分かる。

Table 11: *LDOCE6* Formality in spoken and written English セクション例文中の epistemic stance adverbials と項目

Epistemic stance adverbials	Frequency	Formality in spoken and written English セクション中の項目
<b>epistemic — doubt/certainty</b>		
maybe	1	Suggestions
perhaps	1	Suggestions
of course	1	Disagreeing
definitely	1	Agreeing
<b>epistemic — actuality</b>		
really	2	Disagreeing (2件)
<b>epistemic — source of information</b>		
according to + NP	2	Opinions (2件)
<b>epistemic — limitation/perspective</b>		
generally	1	Agreeing
Total	9	

副詞の例をいくつか見てみよう。Epistemic — doubt/certainty に分類される of course は、Disagreeing を表す例文 *Of course he's entitled to his opinion, but I think he is in a minority on this issue.* で用いられている。*Of course he's entitled to his opinion* という表現を用い、他者の意見を尊重した上で、自分の意見を述べており、丁寧さが表れている。さらに、definitely が用いられた Agreeing を表す例文 *'We should ask them for more money.'* *'Definitely!'* では、相手の言うことに対する強い賛成が表される。Epistemic — source of information に分類される according to は、Opinions の例文中 *According to the researchers, 'some patients tended to see their illness as a*

*punishment’.* / *Locally grown food can be better for the environment than organic food, according to a report published yesterday.* で用いられ、情報の出所を述べ、それらの見解が意見のように表されている。

Table 12 は、上の9件の副詞の Formality in spoken and written English セクション中の項目別の使用順位である。第1位は、Disagreeing で3件(33.3%)、第2位は、Agreeing、Opinions、Suggestions が同件数で2件ずつ(それぞれ22.2%)である。『高等学校学習指導要領』「言語の働きの例」に対応させると、Disagreeing、Agreeing、Opinions は、「d 考えや意図を伝える」に含まれ、Suggestions は、「e 相手の行動を促す」に含まれる。

Table 12: LDOCE6 Formality in spoken and written English セクション例文中の項目別  
 epistemic stance adverbials の使用頻度

Rank	Formality in spoken and written English セクション中の項目	Frequency	%
1	Disagreeing	3	33.3
2	Agreeing	2	22.2
2	Opinions	2	22.2
2	Suggestions	2	22.2
	Total	9	100.0

Formality in spoken and written English セクション (p. A12) の Suggestions の項目中には、控え目な提案をする場合に、副詞 *maybe* や *perhaps* がしばしば用いられることについて、‘People often make suggestions in a less direct way by using **maybe** or **perhaps**, or by using **may/might**’ . のような注記がある。ここで注目したいのは、副詞と助動詞の共起である。控え目な提案をする表現例として、*Maybe we could ask people if they’d be interested in having a concert?* / *Perhaps you could change the settings on your computer?* (p. A 12) が掲載されている。認識的意味をもつ副詞と助動詞の過去形 *could* が共に用いられることにより、提案するときの控え目さが増していると言えよう。

LDOCE4 の中央に設けられた Language Notes: Pragmatics の、‘Feelings and

attitudes' の項目中には、副詞と助動詞について以下の記述がある。

When you are making a statement or expressing an idea, you will very often 'modify' what you are saying by using adverbials that express a degree of certainty or uncertainty. For example, if you say 'I'll **probably** go to the party', it means that you are not entirely sure that you will, and you want your listener to be aware of your uncertainty. If you say 'I'll **definitely** go to the party', you want your listener to know that you are certain to go to the party. . . . you can also use modal verbs to express these feelings and attitudes (p. 982). (下線筆者)

感情や態度を表す時に、確信度に合わせて副詞が用いられ、助動詞もまた同じ機能をもつことが述べられている。このように、副詞、助動詞のようなモダリティ表現の使用についての関連付けられた記述は、学習者の英語使用のために有意義ではないだろうか。

参考までに、『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』には、モダリティに関連する記述は、『高等学校学習指導要領解説』の助動詞の項目に見られるのみで（3.2.1参照）、副詞や、その他のモダリティ表現については言及がない。話し手、書き手の事柄に対する態度を表すことができるのは助動詞のみではない。今後、副詞をはじめ、他のモダリティ表現の体系的な指導法も考慮される必要があるのではないだろうか。

4 ここでは、Formality in spoken and written Englishセクションの9項目において、everyday と (more) formal とタイトルの付いた以下のパートの例文から、それぞれ小規模であるがデータセットを作成し、everyday English と (more) formal English における助動詞と副詞の使用頻度を比較してみよう。<sup>13</sup> 3.2と同様に、AntConcのWord List ツールを用いて分析する。

13 Everyday English のパートに掲載されている言語表現の中にも、formality に異なりがあることを断っておきたい。例として、Agreeing の項目の in everyday English パートの中には、言語表現例として、**you're right** や **I agree** などが掲載されており、両者を比較して、'this [**I agree**] sounds a little more serious and more formal than saying **you're right**' のような記述がある。なお、言語表現及び、それらを含む各例文すべてに formal/informal、spoken/written の注記が付けられているわけではない。

#### Everyday English

Agreeing\_in everyday English  
Disagreeing\_in everyday English  
Apologizing\_in everyday English  
Opinions\_in everyday English  
Requests\_asking someone to do something in everyday English  
Requests\_asking for permission in everyday English  
Suggestions\_in everyday English  
Thank you\_in everyday English

#### (More) formal English

Agreeing\_in formal English  
Disagreeing\_in formal English  
Apologizing\_in formal English  
Opinions\_in formal written English  
Requests\_more formal ways of asking someone to do something  
Requests\_more formal ways of asking for permission  
Goodbye\_in formal letters and emails  
Thank you\_in more formal English

Everyday Englishのデータセットは、Word Tokensが1066、Word Typesは387であり、(more) formal Englishは、Word Tokensが932、Word Typesは415である。いずれも1,000語程度のデータセットである。

4.1 助動詞の過去形は、everyday Englishと(more) formal Englishのいずれにおいても、頻度上位50位に、could、should、wouldが入っている。分析結果は、それぞれAppendix AとAppendix Bに掲載する。Everyday Englishと(more) formal Englishにおいて、これら3つの助動詞の順位が異なる。Everyday Englishでは、should(第20位、10件)、could(第28位、8件)、would(第47位、5件)の順に使用頻度が高く、(more) formal Englishにおいては、would(第8位、15件)、could(第



32位、5件)、should (第42位、4件)の順である。<sup>14</sup> Wouldの短縮形'dを含めると、それぞれ1件ずつ件数が上がり、everyday Englishでは、6件(順位は、第37位となる)、(more) formal Englishでは、16件(順位は変わらない)である。

Table 13は、everyday Englishと(more) formal Englishの比較結果を表したものである。Couldとshouldの頻度は、(more) formal Englishよりもeveryday Englishにおいて、頻度が高いが、両者に有意差はない。一方、would/'dは、(more) formal Englishにおいて有意に高い( $p < 0.05$ )。例文中にwould/'dが用いられているFormality in spoken and written Englishセクションの項目を見てみると(could、should、wouldの項目別頻度はAppendix C参照)、everyday Englishでは、第1位、Requests (3件)、第2位、Suggestions (2件)、第3位、Opinions (1件)であり、(more) formal Englishでは、第1位、Requests (7件)、第2位、Disagreeing (5件)、第3位、Agreeing (2件)である。いずれも第1位はRequestsであるが、would/'dの頻度は、(more) formal Englishにおけるほうが高く、everyday Englishでの頻度の2.3倍である。Everyday Englishにおいて第2位のSuggestionsと第3位のOpinionsの項目は、(more) formal Englishには見られない。

Would/'dとcouldでは、couldは、上で述べたように、everyday Englishと(more) formal Englishの間で有意差はないが、would/'dと異なり、(more) formal Englishよりもeveryday Englishにおいて、Requestsでの頻度が高く(前者4件、後者6件)、さらに、(more) formal Englishにおいて、Opinionsでの使用がある(1件)。Would/'dとcouldの意味の違いについては、本稿では論ずることはしないが、両者の違いを垣間見ることができる。

Table 13: Everyday English vs (more) formal English (助動詞)

	Everyday English	(More) formal English		
	RF	RF	LL	p-value
could	8	5	0.35	
should	10	4	1.91	
would/'d	6	16	-6.16	< 0.05

RF=raw frequency; LL=log-likelihood values。LLの-の値は、助動詞の頻度が、(more) formal Englishよりも、everyday Englishにおいて低いことを表す。

<sup>14</sup> 順位の見方は、3.2参照。

4.2 副詞について、3.2.2の epistemic stance adverbials の頻度を Table 14 で見てみよう。Really は、everyday English には4件あるが、すべて形容詞を強調する用法であるので除いてある。検索結果からも分かるように、調査した epistemic stance adverbials の頻度は、everyday English においては0件、formal English では全5件である。ここで、0件は、どのような意味をもつのか、つまり、本来、出現するはずのない語なのか、あるいは、データセットが小規模なために出現しないのかについて考察をしてみよう。Biber et al. (1999) の調査結果と比較することにより、何かしらの見解を出すことができるかもしれない。

Biber et al. (1999) のコーパスデータの特性とレジスターの設定からして、Formality in spoken and written English セクションから作成したデータセットと比較するのは完全な比較とは言えないが、データの特性が完全に一致するコーパスやデータセットどうしの比較は、通例、困難であるため、あえて今回の比較を試みてみよう。Biber et al. (1999) は、conversation、fiction、news、academic prose の4つのレジスターを設定している。同書(p. 869)の conversation と everyday English のデータを、そして、academic prose と (more) formal English のデータをそれぞれ比較する。<sup>15</sup>

Table 14: Everyday English vs (more) formal English (副詞 [epistemic stance adverbials])

	Everyday English	(More) formal English
<b>epistemic-doubt/certainty</b>		
probably	0	0
maybe	0	0
perhaps	0	0
of course	0	0
certainly	0	0
definitely	0	0
<b>epistemic-actuality</b>		
really	0	2
actually	0	0
in fact	0	0

<sup>15</sup> LDOCE6 の everyday English と (more) formal English の違いは、話し言葉と書き言葉の違いではないが、formality の違いによる語の使用については、参考にすることができると考える。

<b>epistemic-imprecision</b>		
like	0	0
sort of	0	0
kind of	0	0
<b>epistemic-source of information</b>		
according to + NP	0	2
<b>epistemic-limitation/perspective</b>		
generally	0	1
Total	0	5

Biber et al. (1999: 867)によると、これらの14の副詞は、全般に、conversationにおいて、他のレジスターよりも使用頻度が高い。Biber et al. (1999: 869)の14の副詞のうち、レジスター conversationのreallyを除くすべての副詞の頻度は、100万語当たり、1,000件以下である。<sup>16</sup> レジスター conversationにおけるreallyは、100万語あたり、1,100件（認識的意味をもつかどうかあいまいなものも含めると、1,500件）である。Everyday Englishと(more) formal Englishのデータセットは、それぞれおよそ1,000語規模であるため、例えば、Biber et al. (1999: 869)のprobablyのconversationの出現件数は、700件であり、1,000語あたり0.7となり、1,000語規模のデータセットには、出現せず、reallyのみが、1,000件当たり、1件（1.5件）出現する可能性があることが予測される。したがって、everyday Englishにおいて、これらの副詞が0件であったのは、データセットが小規模であったためではないだろうか。一方、(more) formal Englishにおいて、reallyが2件(Disagreeing)、according toが2件(Opinions)、generallyが1件(Agreeing)出現したことは、どのように考えるとよいであろうか。Biber et al. (1999: 869)のレジスター academic proseでは、reallyとaccording toはいずれも、100万語当たり100件、generallyは、100万語あたり200件であることから、1,000語あたりのデータセットに出現する可能性は、0.1件あるいは、0.2件となる。(More) formal Englishに、really、according to、generallyが出現した理由として、Formality in spoken and written Englishセクションは、functional languageという言葉の働きに応じた特定の英語表現を提示したセ

16 LDOCE6は、主としてイギリス英語を扱っているが、Formality in spoken and written Englishセクションには、アメリカ英語も含まれているため、Biber et al. (1999: 869)のイギリス英語とアメリカ英語を一緒にした頻度と比較する。

クションであり、英語表現の特徴に偏りがあることが考えられる。

5 本稿では、LDOCE6の辞典本体中央部に設けられたFormality in spoken and written Englishのモダリティ表現のうち、助動詞と副詞に焦点を絞って分析を行った。言語表現の分析のため、Formality in spoken and written Englishで提示されている例文から作成したデータセットを使用した。本稿で用いたデータセットは小規模なものであるため、助動詞、副詞の使用頻度をつかむには、今後、大規模コーパスを調査して、より大きな観点から分析する必要があることは言うまでもない。学習者が、適切な表現を用いて、考えや意図を伝えたり、依頼や提案をして、相手の行動を促すなどして、効果的なコミュニケーションを図ることができるように、助動詞や副詞などのモダリティー表現の指導は重要であろう。今後、これらのモダリティ表現の体系的な指導法の研究も必要であると考え。LDOCE6は、独自の大規模コーパスを使用し、それらの分析結果に基づいた言語表現を掲載している。したがって、Formality in spoken and written Englishセクションで提示されている言語表現も大いに参考にしながら、コミュニケーションに役立つ場面に応じた言語表現の指導に活用していきたい。

**Appendix A:** Formality in spoken and written English セクション everyday English 例文中の  
語の頻度

Rank	Frequency	Word	Rank	Frequency	Word
1	58	i	26	8	be
2	51	you	27	8	can
3	38	the	28	8	could
4	22	a	29	8	he
5	22	s	30	7	all
6	21	that	31	7	did
7	20	it	32	7	very
8	19	for	33	7	what
9	19	to	34	6	m
10	16	do	35	6	not
11	16	is	36	6	some
12	16	of	37	5	and
13	15	n	38	5	bad
14	15	t	39	5	feel
15	12	about	40	5	right
16	12	in	41	5	say
17	12	me	42	5	sorry
18	11	your	43	5	this
19	10	on	44	5	was
20	10	should	45	5	way
21	10	think	46	5	with
22	9	as	47	5	would
23	9	if	48	4	agree
24	9	my	49	4	always
25	9	we	50	4	come

**Appendix B:** Formality in spoken and written English セクション (more) formal English  
 例文中の語の頻度

Rank	Frequency	Word	Rank	Frequency	Word
1	48	the	26	6	opinion
2	31	to	27	6	was
3	29	i	28	6	with
4	24	that	29	5	accept
5	21	for	30	5	all
6	20	of	31	5	at
7	18	you	32	5	could
8	15	would	33	5	many
9	14	a	34	5	me
10	13	is	35	5	my
11	13	it	36	5	our
12	11	in	37	5	some
13	10	are	38	5	who
14	10	as	39	4	he
15	10	be	40	4	her
16	10	this	41	4	people
17	10	your	42	4	should
18	9	we	43	4	so
19	8	and	44	4	their
20	8	not	45	4	there
21	8	s	46	3	apologize
22	7	have	47	3	appreciate
23	7	if	48	3	but
24	7	on	49	3	can
25	7	view	50	3	do

**Appendix C:** Formality in spoken and written English セクション everyday English / (more) formal English 例文中の could、should、would/'d の項目別使用頻度

	Everyday English	Frequency	(More) formal English	Frequency
could	Requests	6	Requests	4
	Suggestions	2	Opinions	1
	Total	8	Total	5
should	Opinions	6	Agreeing	2
	Disagreeing	2	Opinions	2
	Apologizing	1		
	Suggestions	1		
	Total	10	Total	4
would/'d	Requests	3	Requests	7
	Suggestions	2	Disagreeing	5
	Opinions	1	Agreeing	2
			Apologizing	1
			Thank you	1
	Total	6	Total	16

## Acknowledgements

この論文は、科学研究費補助金の助成を受けて行った研究成果の一部である (JSPS KAKENHI Grant Number JP16K02856)。

## References

- Anthony, L. 2014. AntConc (Version 3.4.3) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available online at <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>
- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Biber, D. et al. 2002. *Longman Student Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Carter, R. et al. 2011. *English Grammar Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Folse, K. 2009. *Keys to Teaching Grammar to English Language Learners*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 藤本和子. 2016. 「Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 第9版の 'Express yourself' notes の分析と英語教育への活用」『英語英文学研究』第40巻2号, 51-72. 創価大学英文学会.
- Nuyts, J. and Auwera, J. (eds.). 2016. *The Oxford Handbook of Modality and Mood*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman Group Limited.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 『ジーニアス英和辞典 第5版』2014. 東京：大修館書店.
- Longman Dictionary of Contemporary English. 4th ed. 2003. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE4)
- Longman Dictionary of Contemporary English. 5th ed. 2009. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE5)
- Longman Dictionary of Contemporary English. 6th ed. 2014. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE6)
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 9th ed. 2015. Oxford: Oxford University Press. (OALD9)
- 『中学校学習指導要領』2008. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/___icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf) (accessed 20 September 2016).
- 『中学校学習指導要領解説 外国語編』2008. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912\\_010\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf) (accessed 20 September 2016).



- 『中学校学習指導要領英訳版（仮訳）』2010. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298356.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298356.htm) (accessed 20 September 2016).
- 『高等学校学習指導要領』2009. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf) (accessed 20 September 2016).
- 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』2009. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000\\_9.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf) (accessed 20 September 2016).
- 『高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）』2010. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm) (accessed 20 September 2016).

*Pearson English Language Teaching JAPAN • 2017*. 2017. Japan: Pearson Japan KK.

LONGMAN Dictionaries Online. 2016. Pearson education Ltd. Available at [www.longmandictionaries.com](http://www.longmandictionaries.com). (accessed 25 September 2016).

PearsonELT.com. 2016. Pearson. Available at <http://www.pearsonlongman.com/dictionaries/corpus/> (accessed 20 September 2016).



## 編集後記

今回は、英語学関係で2本の論文を掲載することができました。関係各位に御礼申し上げます。次号では、会員諸氏の奮ってのご執筆をお待ち申し上げます。

2016年は、連邦王国ではEU離脱投票、米国では次期大統領選挙と大きな動きがありました。結果、両方ともpopulismといわれていますが、民主主義を代表する出来事と思われます。投票で過半数を取ったものが採用される、また、相手より1票でも多く獲得したものが勝つ、というのが民主主義で、内容の良し悪しは関係ありません。如何に多くの有権者に投票してもらうかにかかっています。

2016年度のノーベル文学賞が米国のBob Dylanに贈られました。Dylanは私よりも上の世代で、私はthe Beatlesの世代にあたり、彼の“Blowin’ in the Wind”もPeter, Paul and Maryで聞き、直接彼の歌を聴くということはあまりありませんでした。中学、高校生の時（1960年代後半）、学校でこのような“popular”な歌を聴こうとすると音楽の先生が許してくれませんでした。なぜですかと聞くと「音楽ではないからだ」とおっしゃいます。じゃあ、何ですかと問い詰めると「雑音です」というお答えでした。当時は理解できませんでしたが、音楽の先生にとって「音楽」とは「西洋のクラシック」だったのでしょう。その「定義」から外れていたわけです。今までこの賞の対象はliterature properでしたが、突然「俗」の文化に日が当たりました。これはsinger-songwriterの代表としての授賞だと思います。嗚呼、John Lennon! と思ってしまうのですが、なにはともあれ、おめでとうございます。

国内では、気温の変動が激しく、日常での対応が大変でした。東京都では、都知事選挙後、「築地・豊洲」問題や「オリンピック」問題が浮上しています。できるだけ無駄なお金を使わずに、食の安全が確保できるよう、世界が注目するスポーツの祭典が成功するようお願いしてやみません。

（文責：松島 龍太郎）

## 本号の執筆者

松 島 龍太郎 (まつしま りゅうたろう) 創価大学教授  
藤 本 和 子 (ふじもと かずこ) 創価大学教授

## 投稿規定

1. 特別な場合を除き、投稿の時点において過去2年間継続して創価大学英文学会会員であること。
2. 研究論文, 400字詰め原稿用紙27枚程度(10頁以内), 英文は76(ストローク)×28(ライン), (10ページ以内) 厳守。応募者多数の場合, 編集委員会で検討します。
3. 次号メ切は2017年5月15日。
4. 宛先, 創価大学文学部『英語英文学研究』編集委員会。
5. テキストデータの提出は「USBメモリー」をお願いします。

創価大学 『英語英文学研究』第80号(第41巻第2号)

2017年3月1日

代 表 者 浅山 龍一

編集委員 松島 龍太郎

木下 薫

高橋 正

発 行 者 創価大学英文学会

〒192-8577

東京都八王子市丹木町 1-236

Tel. 042-691-2211

印 刷 所 株式会社紀伊國屋書店

本誌を無断で転載することを禁じます。

©The English Language and Literature Society of Soka University. 2017



**STUDIES IN THE ENGLISH  
LANGUAGE & LITERATURE**

No. 80 ( Vol. 41, No. 2 )

*March 2017*

THE ENGLISH LANGUAGE AND  
LITERATURE SOCIETY OF  
SOKA UNIVERSITY